象形と指事

漢字の出末方には、最初、次の二つの方法がありました。第一が“象形”で、第二は“指事”と呼ばれるものです。

言葉には、目で見ることの出来る物を表わしたもの、つまり“形のある物”と、目で見ることが出来ない、つまり“形のない物”とあります。

形のあるものは、その形を絵のように書いて表わすことが出来ますから、「山、川、日、月」というように、絵文字風に表現します。形を象（かたど）るという意味で、これを“象形”と名付けました。

これに対して、形のない言葉は、絵にすることが出来ません。つまり、抽象的な事柄は、その事柄を符号で指し示すよりほかに方法がありません。

そこで、上という意味の事を、線や点で指し示すことにより、その意味を表わしました。抽象的な事柄を指し示す、という意味で、これを“指事”と名付けました。“一”や“二”も、形を備えていない言葉ですから、これを線だけでその意味を表わしました。これも指事字です。

最も古い文字は、この象形と指事の二つの造字法によって作られています。理屈から言えばどんな言葉でも、形のある物なら、すべてその形を絵のように書き表わせるはずです。それは“象形”になります。

形のない事柄、頭の中にしか存在しない抽象的な事柄は、すべて線や点で表現できるわけです。それは“指事”になります。

とは言うものの、それは理屈で、なかなかうまく表わせない物や事があります。たとえば、酒を表わすために、酒の器を絵にしても、それは器を表わすのか、酒を表わすのか、絵だけでは解りません。また、歩く事を表わすのに、足の形を用いても、足そのものを表わしたのかと思われてしまいます。